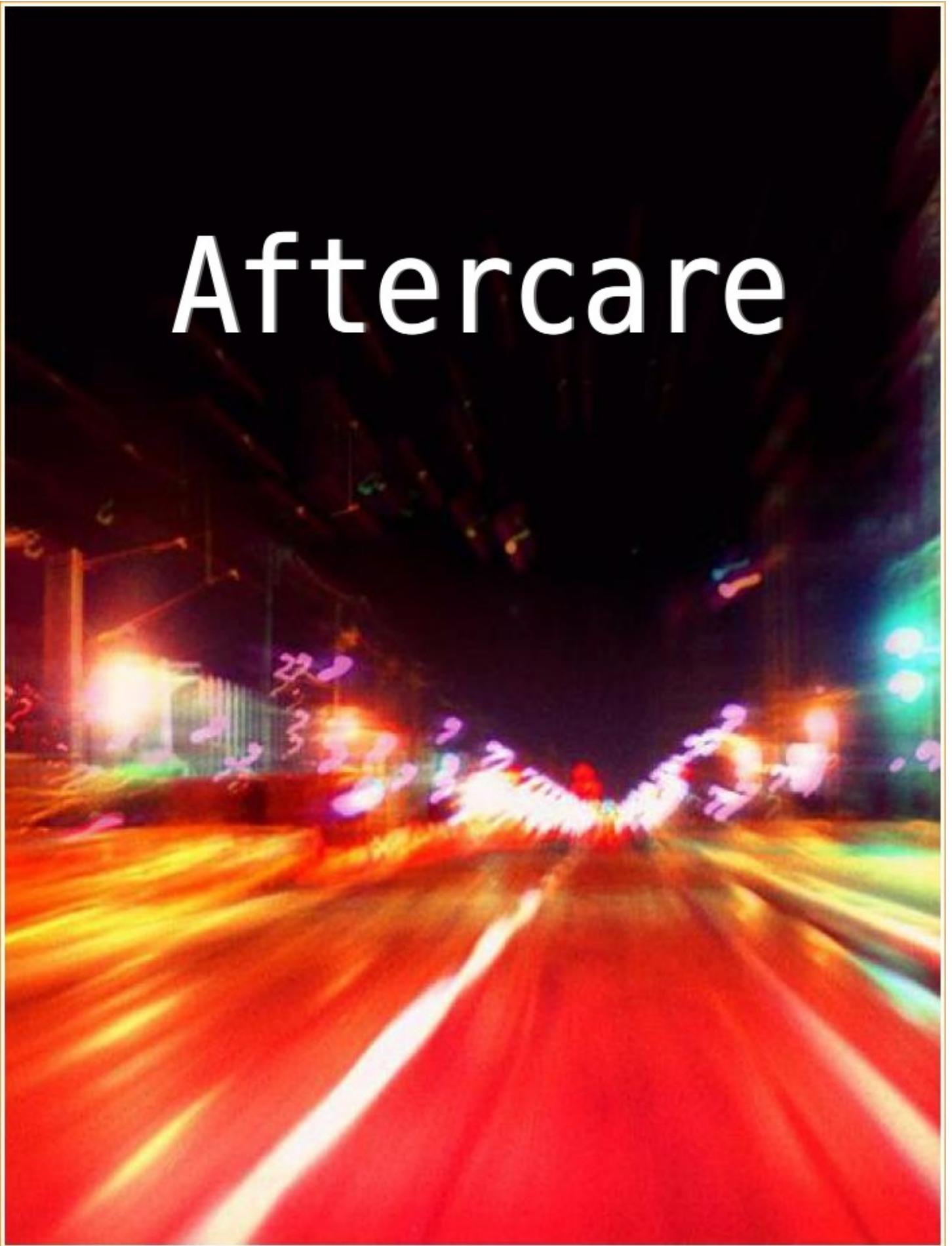


Aftercare



便利屋

街の中心部より東へ車で10分程走ったところに、ロシア船舶などがよく停泊している漁港がある。

そのの、漁業組合の事務所3階に、ある男がまがりしていた。周囲では、その男のことを（河童の翔）と呼んでいた。何故そう呼ばれるようになったのか理由を聞いてみる。すると、その男は夏がダメらしい。夏バテだと言っては仕事をせずにダラダラしているそうだ。けれど、夏が苦手と言っても食料だけはしっかりと買い出しに行くという。出掛ける際は決まって特注品の日傘をさすらしいのだ。そこから、夏場に頭隠して河童のようだ。と噂が広がり（河童の翔）と名付けられたという。

河童の翔こと久瀬翔（くぜしょう）は、なんでも江戸時代より続く「便利屋」の主人らしいが、なんせ夏場働かないものだから、市内中心部にあった代々続いた店を追い出された。

それでも、なんとか知り合いのツテでこの漁業組合の事務所3階にまがりすることになったのだが、今の所、働いている様子はまったくない。

なんせ夏真っ盛りだから。

しかしながら（働かざる者喰うべからず）と言ったことわざからして、仕事をしないと喰っていけない。

昼働けない彼は、ロシア船舶が停泊した時期だけ、夜になるとそのロシア船に行き、荷物の積み降ろし作業などを手伝い、身銭を稼いでいるようだ。

それによく私も借り出された・・・

私？私の名前は千里、自他共に認める、か弱き美少女なのだ。

何？

美少女と自分から言うのは可笑しいと？

何を言うか、こ、こ、これは、ちゃんとまわりも認めているのだ。

得に、漁協の（おっちゃん）らは何時も可愛いと言ってくれるのだから、間違いない。話しを続けるぞ。

それを無視して、男臭い重労働など出来るはずがない。

だから、手伝いはもっぱらフォークリフトでティーとこなしてしまう使える女なのだ。

これで解ったか。

ちくしょ・・・

私は使える女で美少女なんだ・・・

う～。

前フリ終わり。

次、次、進めろ！！

．．．．．

．．．助監、前原バ～カ。

もう二度と前フリなんかやってやるもんか！！バ～カ。

．．．．．

あ～あっ、千里ちゃん怒らしちゃって知らないよ。

本当にあの子は此処じゃあ人気者なのだから。

20歳そこそこだけどよく働かし、

漁協の漁師連中には確かにマスコットの人気者なのだから、

此処の漁師敵に回したら帰れないよ。

前原さん．．．

．．．．．

では、ここからはわたくし漁業組合組合長の田淵がナレーションを勤めさせていただきます。

ええ、先程までナレーションをして下さいました、久瀬千里（くぜちさと）ちゃんはですね。河童の翔の遠い親戚なのですが、身寄りがなかったために翔が親代わりとして引き取って養っております。

「便利屋」の仕事がある時は千里ちゃんが助手として手伝います。

ハイ。

．．．．．

えっ、ハイはいらない。はあ、解りました。

それでは、改めまして「便利屋」とは、読んで字のごとく、何でも仕事をやる。

それが仕事。例え、便所掃除だろうが、ゴミ屋敷の片付けだろうが、

依頼があれば何でもこなすのがモットーです。

あそこでボーとしている男が便利屋の店主翔ですが、見ていただくとお解りの通り。

男のくせに日傘をさして、のんびんだらりと生きているのが現状なのです。

私は悲しい。

ガッゴガァ

ちょっと田淵のおっちゃん。

のんべんだらりとはひどい言い方だな。

それにね、この日傘は政五郎さんが丹精込めて俺に作ってくれた物なんだから。

グゴッガガッ

しっ、翔。マイクを取るな。私が話しているだろが勝手に入ってくるんじゃない。

す、スタッフの皆さんも困ってらっしゃるだろう。

.....

ったく。このクソ暑いのにギャラくれるってから、暑い中協力して待ってんじゃないか。だから、早く終わらせてくんない。

こっちはクーラーの効いた部屋に早く戻りたいんだからさ。

田淵のおっちゃん頼むよ。

ハハハッ、たく。すいません皆さん。

それでは、ドキュメンタリー「密着、便利屋の男」ご覧ください。

.....

ふ～、あっ、皆さんお疲れ様でした。

よし、じゃあ、次俺ね。

えっ、何？今日はこれでおしまい。

何で？はっ、便利屋の仕事の時にまた来る。

どういう事？ドキュメンタリーの撮影だから・・・。

じゃあ、ギャラは？全部終わってから～

何だよ。それじゃ、俺の待ち時間は無駄だったの～。

はははっ、働かざる者喰うべからずってこった。

ざまあみろ。河童の翔ちゃん。

.....

くっそお～ぜってえ仕事取ってやる。

それでは、本編スタート。

依頼

漁業組合3階の便利屋の事務所に、役場の政やんから電話連絡があったのは昨日の夕方だった。電話に出たのは翔ちゃんだったが、話しの内容からするとまたゴミ屋敷の片付けを頼まれたらしい。

政やんは、この「便利屋」にことあるごとに、仕事を依頼してくれる有り難い人だ。それゆえ、政やんの依頼に関しては例え夏場だろうと引き受けざるをえない。

「ん、死んだ婆さん？あぁ、解った」

事務所が一番奥には、事務机が置かれている。

そこに踏ん返り返りながら、電話対応する久瀬の翔ちゃんが居た。

まあ、事務所といっても、此処は漁業組合ビルで、倉庫として使われていた部屋を、田淵組合長の好意で貸してもらっている。

従って、組合関係の備品やら何やらが、所狭しと置かれていた。

その中に事務机と接客用のテーブル組が有るだけなのだ。

まあ、客はあまり此処には来ないから構わないと言えは構わないのだが、ちょっと悲しい。

しかし、今回も翔ちゃんは政やんの依頼を素直に引き受けた様子。

「翔ちゃん、仕事？」

私は古びた接客テーブルセットの古びたソファに座り、DSのト○ダチ○レク○ヨンをやめ翔ちゃんに聞いた。

「あぁ、政文からの依頼でゴミ屋敷の掃除らしい」

翔ちゃんは、事務机にデンと投げ出した足を下ろすと、何時もの澄んだ目を私に向ける。

髪は何時もオールバックにして、どこかの探偵気取りではあるが、容姿だけ観ればそうとれなくもない。

身長は約180センチ、すらっとした体型で肩幅もしっかりしている。

顔は・・・まあ、少し童顔で清んだ目をしているから。

多少・・・顔だけは探偵らしくないが、

それは、「便利屋」だからこの際よしとしよう。

「引き受けたんでしょう？」

私は、何時も活発な女子。

服装的には下からダークブラウンのグラディエータサンダルを履き、

足はスラットした美脚。

デニムのショートパンツにトップは、今流行りのガーリーなワンピースでキメている美少女である。

.....

えっ、誇大広告みたいなこと言うな。

あんた、本当に失礼ね。助監のくせして。

.....

「うん、だから何時もの、用意しておいてくれないか千里。

俺はレンタカー手配しとく」

翔ちゃんが言った何時ものとは、怪我のないよう手袋と、
ゴミを分別しなければならないので地区専用の袋を用意しろ。
その意味が何時ものということになる。
手袋なしだと、かなりヤバいっす。
たまに、デロデロに溶けた何かをつかむことがある。
何か得体は知らないが・・・そう、スライムを想像していただければよいかも？
それを手にした時は・・・一日、落ち込むよ。
その感触と臭いには、一か月分のツキを持っていかれた感じで・・・

.....

余計な話はイイって。チッ。
「はあい。解った」
私は、漁業組合関係の雑多な備品を掻き分け、手袋とゴミ袋を探す。

.....

オッケ？
そっ。はい、お疲れ様です。
じゃあまた明日、Ｙ区の現場でえ。

「ふう、翔ちゃん疲れたよ」
「普段どおりにしてればいいだろ」
机に再び足を投げ出した翔ちゃんが、澄んだ目を細め笑って居た。
そうだ、まだまだこの撮影は続くのだ。
少しは、リラックスしないと・・・明日からが本番なのだから。

ゴミ屋敷

Y区の現場に到着した我々「便利屋」は、レンタルした4 tトラックを横着けすると、ゴミ屋敷の全貌を目にする。

それは、敷地内に散乱するゴミの山。

何を考えこのようなゴミを収集したのか計り知れないが、

何はともあれ、この状況を打破すべく現場への突入を試みようとしていた。

今回のゴミ屋敷は、Y区の閑静な住宅街に存在していた。

周囲の近代的な建物と違い、昭和初期に建造されたと思われる木造平屋の住まいは、時代に取り残された遺物でもあるかのようだ。

政やんに聞いた話によると、半年前まではこのようなゴミ屋敷ではなかったらしい。

ここの以前の住人は89歳になる老女で、独り淋しく生活してはいたが、家屋敷はいつも整然とされていた。

だが、ある時。

この老女に医者から認知症の診断が下される。

その頃からこのような状況になり始めたらしい。

一歩敷地内に入ると、既に異臭漂う雰囲気にも圧倒されながらも前へと前進し続ける。

玄関にたどり着いた私達は、古びた引き戸をゆっくりと開ける。

その瞬間、夏場のむっとする空気と相まって部屋中の臭気が私達を襲う。

中は想っていた以上の光景が広がっていた。

既にゴミでうめつくされた玄関からは、蛞蝓でも通ったかのように、ウネウネと細い道が奥へと続いていた。

私達は、用意してきた手袋をはめチャコールフィルタ付きのマスクをすると、蛞蝓の道に足を一歩踏み出した。

.....

何？

えっ、マスク？言わなかった？それぐらい常識でしょ。

用意してないの・・・

まったく。しょうがないな、車に簡易マスクがあるから使っていていいよ。

.....

まったく、助監督ならそれぐらい用意しなっただの。前原。

.....

ハイハイ、じゃあ続きいくよ。

今日の翔ちゃんの出で立ち、凛々しい作業着。

薄緑のツナギの背中にはLove & Pieceとある。

.....

また、何？ツナギが凜々しいかって？
仕事をしている翔ちゃんは何を着ても凜々しいの！！
そのLove&Piece。遅ればせながら、我社名である。
翔ちゃんの代になってからつけたみたいで。
由来に関しては、たんに好きだからとのこと・・・

玄関を入れて右側には6畳の茶の間。左側は、8畳が2間続いていた。
かつての茶の間では、客を招いて談笑していたことだろう。
その奥には、キッチン。未だ食器類がそのまま残されているのが物悲しい。
キッチンの左側に4畳半の部屋と奥側に廊下、それを抜けると8畳の部屋があった。
全ての部屋の窓を開けはなつと、一旦玄関へと戻りすぐ左側にある縁側の雨戸も開ける。
これで多少新鮮な空気が通るだろう。
それでも、臭いの元が有る限りマスクは欠かせない。

「それでは、始めますか」
翔ちゃんの合図とともに、玄関からゴミの選別を行う。
しばらくして、玄関らしくなったころ。
品の善い、草履が現れた。
此処に住んでいた老女のものだろうが、生前は着物を着る人だったのか、下駄箱にも数多くの草履が観られた。

そして、蛞蝓の道は本来の機能を取り戻し、以前の各部屋をつなぐ通路として眼前に現れた。
このころには、二人共汗だくになっていた。

.....

ん、休憩しようって？うん。まあ、翔ちゃん次第ね。
「翔ちゃん、休憩しようよ。こう暑くちゃたまないわよ」
「おう、そうだな。これじゃあ、まあ三日はかかりそうだから、急ぐこともないし」
そう言うと、翔ちゃんは縁側のある庭へと向かった。
庭もゴミが散乱し手入れも行き届いていなかった。
それでも、ゴミや雑草などを除けばかなりのデザインセンス。
良い庭師さんが手がけたのであろうことは、こんな私にも理解できた。
そこにある庭石に腰かけた翔ちゃんが、私に澄んだ眼を向ける。
「千里。あそこにある花の根元、見てみな」

(指さす方向を見ると、そこにはオレンジ色の派手な花が咲き誇っている。
その根元を見ると・・・淡い光輝く老婆の姿が見えた。
これは、スタッフには内緒の話だが、私たちはある程度残留思念的なモノがみえてしまうのだ。
これは、体質と言うか血と言うべきものなのか。
いずれ、詳しく説明することとして、今はスタッフにばれないよう振舞う)

「えっ、何。ああ、凌霄花（ノウゼンカズラ）だよ。綺麗だね。
手入れしてあればもっと花が映えるのに。ふうん。で、あれが、どうかした？」
「ああ、後で確認することがあるからさ」

（翔ちゃんは何時もの調子で笑うと、「確認」と言った。確認って...何～嫌な予感）

.....

何？確認って何かって？そんなの知らないわよ。
あんた、いちいち五月蠅いわよ。
前原！いいから、あんたは撮影の準備でもしてなさいよ。

.....

再び、私達が片付けを始めたのは茶の間から。
30分ぐらい作業していただろうか、ゴミの中から卓袱台（ちゃぶだい）が現れた。
埃を被り、だいぶ傷んだ卓袱台を退けると、その下に風呂敷に包まれた箱状の物を見つけた。

「翔ちゃんこれ」
私は、近くにいた翔ちゃんに声をかける。
「ああ、それかな？中に何があるか確認してみな」
傍に来て、翔ちゃんが告げる。
それ？確認？何ゾ！！私はとりあえず、包みを解き中身を見る。
中は、お菓子の詰め合わせだったアルミ缶。
蓋を開けると、中身はアルバムらしき物と、日記。そして、預金通帳。
名義は（鈴木トメ）と記載されていた。
翔ちゃんが確認したいと言ったのは、このことだったのか？

「これ？」
「ああ、たぶん。千里、鞆とデジカメ」
「うん、解った」
私は、翔ちゃんに言われたとおり鞆とデジカメを車から取ってくると、目の前に置いた。

.....

ん、ああ。あれは、個人的な物だから、状況写真を撮って依頼主におうかがいをたてるの。
本来なら、依頼主立会のもとゴミの撤去作業が行われるんだけど、信用されているから丸投げされてるって訳。

「千里、ちょっと手伝って」
翔ちゃんは、状況写真を撮り終わると、次に通帳とアルバム。日記の内容を撮影した。

（本当は中身を撮影してはいけない。ホホッ）

撮影が終わると、アルバムと通帳をAFTERCAREと書かれた。

アタッシュケースにしまい施錠する。

.....

ん、アフターケアって何かって？ううん、翔ちゃんのサービスってどこかしら。

ん、なら、アフターサービスではって？残念ながら、これはケアになっちゃうんだよなあ、き
っと・・・悲しいかな、無報酬だし。

理解出来ない？五月蠅いわよ、前原。

.....

ある程度片付けを終えると、4 Tonトラックいっぱいになったので今日は片付けるのを止め、ゴミ
処理場に行って撤収となる。

だが、翔ちゃんはこれからが本番とばかりに、政やんに電話をすると何やら怪しい顔つきをして
いる。

予感的中。やはり、ケアに行くとも見える。

「千里、政文が任してくれると。だから、何時ものところ行くから今日はこの辺で終了ってこった
」

「うん、解った」

一旦事務所に戻ると、翔ちゃんはあらためて出かける準備をしていた。

.....

何？もう終わったんだから帰んなさいよ。

えっ、これからどうするって。

それは、アフターケアのお時間だから無報酬でのお仕事が始まんのよ。

なっ、それも撮影したい。ダメ、絶対。

翔ちゃんが許さないから、絶対無理。

ええ、隠し撮りするからって・・・

ダメだって言ってんだろ。前原～

占い！？

私達は、車に乗り込むと駅前近くの知人の元へと向かった。

〇〇横商店街の東側に、1番古い雑居ビルがある。

そのビルの階段を2階に上がったところに、これまた雑多な、戦後の闇市かと想わせるほどの商品が並べられるなか。

奥へ、奥へ進んでいくと、突き当たりには、原色のネオンカンで（KAEDE）と銘打って、占い館（楓）が居を構えていた。

入口と思われる場所にはドアがなく、漆黒のカーテンで仕切られている。

中に入ると、深海かと錯覚するほどのインディゴブルー。

6畳程のスペース中央にテーブル、対面には2脚の椅子があり。

占いといえば定番の水晶は、此処には見当たらず。

テーブルの上にあったのは、黒い猫。いや、居た。

「おっ、相変わらず、こちらの千里（せんり）さんはふてぶてしいね」

翔ちゃんは手前の椅子に座ると、此処の飼い猫千里の頭を撫でながら話し掛ける。

私は、この黒猫が少し苦手なので、翔ちゃんの後ろで控えていた。

目の前に座るこのメイド服姿の女性は、これでも一応占い師だ。私と歳はそうはなれていないと聞いたことがある。

その若き占い師は、巷じゃアタルと評判の人だそうな。

「それで、久瀬さんは何をしてほしいと？」

「ああ、この通帳の引き落としがあった場所とそれを行った人物。それが知りたい」

「どうして、そのようなことをお調べに？」

「ああ、実はさ。ここに、ある婆さんの日記がある。これは半年程前に書かれたものらしいんだが。それを読んだとき、面白いことに気付いた。それがココ」

翔ちゃんは、あのおばあさんの日記を指差して、澄んだ目を細める。

そこには、こう書かれていた。

（私が認知症と診断されてから、この日記を書き始めた。それは、担当の先生の奨めもあったのと、病気の進行を遅らせるといった意味も含めてだったが、それが、こんな事になるとは思わなかった。病気と共に暮らし始めて3ヶ月ぐらいの頃。財布に入れた金額と使った金額を記入していたが、何時も、何日かすると日記とあわないことが度々あることに気が付いた。

でも、最初は解らなかった。

私が忘れていただけかも知れないと何度も確かめたけど、私の記憶は既に曖昧なものになっていた。けれど、ある日、おじいさんの形見である短刀が無くなった。まさか、泥棒に遭ったのかと思い。あの人に相談した。だが無下にそんなことがあるはずないと言われた。おじいさんの形見に関しては私の勘違いではない。

写真もある。

日記も読み返してみた。そしてあの人が来た日に限ってお金がなくなること気付いてしまい。まさかと思い、家にあった通帳なども確認した。やはり、なくなっていた。お金はいい、けどおじいさんの形見だけは探さないと)

記憶のあるうちにと書いて書いたのだろう。文字が走り書きされていた。そのあとは、意味不明な文章で理解しがたかった。

「これを見ると、どうやら誰かが婆さんの金を抜いた形跡がある。それに、爺さんの形見っていうものも」

「なるほど、興味深い話しですね。それで、久瀬さんは何をしたいのです？」

楓さんは、このあたりのネタに凄く反応する。

事件と聞くとむずむずすると以前言っていたことを思い出す。

「実はそれなんだが、俺はココに書かれた(あの人)を見つけたいと思っている。必死に生きていた80過ぎの婆さんから、なけなしの金を失敬する奴の顔を拝んでみたいんだ」

「拝んでどうすると」

楓さんは妖しくも不気味ともとれそうな含み笑いをすると翔ちゃんに告げた。

「決まっている。アフターケアするだけさ」

「解りました。それでは、お調べします。それと、先程の日記によると短刀の写真もあると書かれていましたが、それはあるのですか」

「ああ、あるにはあったけど、小さすぎてあまりはっきりしないんだよ」

翔ちゃんはアルミ缶に入っていたアルバムも楓さんに見せた。

すると、楓さんはニヤリッと笑い。

「では、こちらもお預かりして、後日久瀬さんにメールで結果をお伝えします。それで、よろしいですか？」

「ああ、頼む」

商談成立といった感じだろうか。

まあ、占い師に頼む内容ではないのだが、

これもいずれ解ることだが、楓さんもかなりの人物ということかな。

それに、楓さんに頼むのが翔ちゃん流なのだ？

.....

(ん？誰か居たような？私の勘違い？)

.....

凌霄花

次の日も、あのゴミ屋敷に向かった。

翔ちゃんは夏場の外の仕事は、（河童の翔）の名が廃ると言って外の作業はっさい私に任せると中に入ったきり出て来ない。

（庭の片付けがある程度めどがついた時、ふとあの凌霄花に目を向ける。

今日も居た。悲しげな表情でお婆さんがこちらをうかがっている。

何が言いたいのか私には解らない。

そこまでの力は私にはなかった。

けど、翔ちゃんはある程度なら意思の疎通が出来ると言っていた。

だから、ケアすると話したんだと思う。

次に何をするのか解らないまま、作業を続ける。）

.....

何、ぶつぶつ独り言ってる？

はっきりしゃべれ？。

五月蠅いわね、暇ならあんたも手伝いな。

ま・え・は・ら。

（助監督の前原は完全に、私の下に見ているのだ。かなり年上だが...ホホッ）

その時、翔ちゃんからお声が掛かり、振り向く。

「千里。少し休憩しよう」

だいぶ片付いた縁側で、翔ちゃんが笑っていた。

「うん、解った」

（縁側に二人並んで座ると、翔ちゃんが凌霄花をじっと見詰めている。

その横顔を私は覗き込んで見た。だが何を考えているのか解らない。でも、ちょっと悲しげな表情だ。）

「ねえ、何が解るの」

「あっ、ほんの少しだけ。婆さんの気持ちが伝わってくる感じかな」

（私達は、スタッフに聞こえないように静かに会話した）

「それで、何て？」

「お願いいたします。ってさ、それだけだ」

「お願いされちゃあ仕方がないね。便利屋だもん」

「ああ」

（二人の様子を見ていた、前原が変な顔でこちらをうかがっていた。）

その夜、楓さんからメールが届いた。

内容は、昨日頼んだ預金通帳からお金を引き落とした人物について、それと、なくなった短刀のことも記載されていた。

まず。鈴木トメの預金通帳からお金を引き落とした人物だが、ATMからの写真はある。それを見ると、どうやらおばさんのようだ。だが、本人の情報は残念ながらない。前科者ではないのだろう。

次に、短刀だが。あの古びて不鮮明だった写真は、よりシャープにし鮮明な画像処理を加えてある。前のよりは雲泥の差があった。この短刀はかなりの年代物だったらしく。名のある刀鍛冶によるものだった。その名が「短刀 無銘（名物○森○宗）」

これを見た翔ちゃんが、いきなり立ち上がると携帯でどこかに電話し始める。

どうやら、政やんのところらしい。

「あ、政文。俺、翔だけど、少し聞きたい事があるんだけどいいかな。ああ、うん。あのゴミ屋敷の住人のことで、半年以上前になると思うんだけど、あそこの婆さんからか、若しくは通っていたとこの担当医から頼まれたことってなかった。そう、うん。それでいい。うん、ああ、解った。ありがとう」

翔ちゃんは、何やらメモを取るとそれを私に預けて、また電話しだした。

「あっ、政五郎さん。翔ですけど、ご無沙汰しています。少しお話いいですか？はい、実はお願いがありまして、ええ。いいですか？あの、政五郎さんの知り合いの骨董屋で半年ぐらい前に、短刀を買い取った店がないか聞いてほしいんです。ええ、刀の短刀。はい。いいですか？はい、ではお願いします」

ヨシッという顔でこちらに向き直ると、笑顔で私にこう告げた。

「千里、明日な、そのメモに書いてある場所に行って、さっき楓さんから届いた写真のおばさんが居るか確認してくれない。もしいれば、その人の顔写真を隠し撮りしてきて、あとは、できれば名前が解ればなおいいかな」

「えっ、此処に？あのおばさんが居るの？でも、どうやって名前なんて調べればいいの？今は、なんたら保護法で簡単には・・・」

「個人情報保護法な。そうだなあ」

翔ちゃんは、右人差し指を唇にあて何かを考えているようだ。

「なら、こんなんでも」かと私に策を教えてくれたのは二パターン。それを私にやれと？

私は渋々了解して、翌朝メモの場所に行くことが決まった。

「それじゃあ、頼む。俺はゴミ屋敷を担当するからさ」ニヤリッと笑う翔ちゃん。もしかして、暑いのが嫌なだけでは？

潜入？

ゴミ屋敷3日目。

私は、翔ちゃんに頼まれたメモの場所に向かう羽目になったのだが、
実のところ、車の免許はあるのだが、ペーパーなのだ。

だから、普段は原チャリが私の交通手段である。

しかし、夏場のバイクは暑くてかなわない。

エンジンからの熱風もそうだし、走っていれば気持ちいいが停車した時のあの温度差がたまらなく思える。

目的地までは、原チャリ5分で行ける。

だが、暑さとヘルメットの蒸れ蒸れ感が。

あ～嫌あ。などと考えていると。

程なくして、メモの場所

「介護ヘルパー・天使の羽」に到着した。

私の役目は、おばさんがいるかどうか？

それと、写真と名前・・・

どうしようか迷って見たが、私の頭はそんなに複雑には出来ていない。

あたって砕けるか？

「すみません。少しお尋ねしたいことがあるのですが。誰かいませんか？」

すかさず、天使の羽に潜入し事務所内をうかがう。さほど、中は大きくはなく、事務机が6人分
あるだけで後はごく普通の事務所と変わらない。

介護の会社だから、得体の知れない機械とかあると思っていたが、どうやら間違いだったらしい
。

しばらく待っていると、事務所の奥から50代後半で小太りのおばさんが出て来た。

私は、軽く頭を下げると彼女に詳細を告げようと・・・

「はい、何かご用？」

うわあ、本人だ。あの写真で見た彼女が目の前に居る。

てことは、第一パターンを遂行せねば・・・えっと。

「あ、すみませんが。私のお婆ちゃんの介護をお願いしたいのですけれど。以前近所に住んでいた方に教えて頂いたのですが。とても親切に介護してくれると評判で、えっとお～名前が出てこないのですけど。Y区の鈴木のお婆あちゃんに聞いたのですけど・・・」

「あら、トメさんのことかしら？」

食いついたかあ

「はいそうです。鈴木トメさんから。亡くなるちょっと前に聞いたのです。それで、評判の良い
その方に、お願いしようと思っているのですけど・・・」

嘘八百である。が、目の前のお婆さんはこのような嘘に食らいついてきた。

「それなら私よ」

小太りな体を、（どうよ）とばかりに胸を張るお婆さん。

「ええ、そうなのですか。見た感じからしてそうかなって思っていたのですけれど、探していた
方が目の前にいらっしやるとは」

ここまで来ると嘘にも慣れてくる。

「ほほっ、そうかしら。でも私よ」

彼女は、ポコンと膨らんだおなかを微妙に揺らしながらしゃべり続けていた。

「そうですか、ではこちらの？」

「ええ、佐々木、佐々木晶子。ここの介護ヘルパーよ。私でよければお引き受けします。それで、どのような介護をご希望ですか？」

ビンゴお〜。私の勝ちい。

「よかったあ。それじゃあ、金額的な事もありますのでパンフレットか何かあれば頂きたいのですが、それでうちの両親と相談して決めます。あります、パンフレット？」

最後のこれは、逃げる口実だけれど。

「そうですか、解りました。パンフレットもございますよ。その中に料金表などもございますので、よくご検討下さい」

彼女は事務機に向かい、パンフレットを手にするると私の前に戻り、それを手渡してくれた。結局、最後の最後まで疑う事無く、おなかを揺らし続けていた彼女。

「はい、それではその時はよろしく願いいたします」

私は、再び彼女に頭を下げ、さっさと退散した。

これで、顔と名前は確認済み。

残りは、隠し撮り。

とりあえず、近くにあった児童公園の物影に潜み彼女が出て来るのを待つことにした。

しかし、まだ午前だというのにこの暑さ。

翔ちゃんが逃げるのも当然かも。

暑いぞ、前原！って、居ないよね。

．．．．．

もうすぐ熱中症になりかけた頃、彼女が天使の羽から出て来た。すかさず、顔の隠し撮りに成功したが、後30分此処にいたらやばかった。

とりあえず、目的は達成されたから．．．

アイスでも食べてから帰ろう。

私はいったん事務所に戻り、デジカメのデータをプリントアウトしてからゴミ屋敷へ向かうことにした。

プリントが終わると、そこに佐々木晶子の顔がある。

目の前で話す彼女は穏やかに見えたが、一人で居る時は少し気が強そうにみえた。

さて、これを持って翔ちゃんに渡して...

また、ゴミ屋敷の片付けかあ。

明日には終わるかな？終わってほしいな。

私が原チャリに乗り込み、出掛けようとした時、

4 Tonトラックで翔ちゃんが戻って来た。

「あれ、翔ちゃん。だいぶ早くない？」

車から降りた翔ちゃんは、直ぐさま日傘をさすと暑そうに目を細める。

「ああ、今日は撒収してきた」

何だと？まさか暑いから帰って来たのではないだろうな！

「えっと、何で」

私は暑いからと翔ちゃんが言ったら、とっちめる気構えでいた。

「ああ、暑いから。てのは嘘で、政五郎さんから電話があって例の短刀の件。ある骨董屋で、それらしいの買い取ったって話しだから。これから行こうと思ってな」

ふっ、翔ちゃん命拾いしたね。

「そう、なら私も行くけど。撮影スタッフは？」

「ああ、それなら帰ってもらった。明日が最終だからって言ってな」

やっと明日で終わるのか...助かる。

それじゃあ、助監督の前原とも明日でお別れだな。

明日は、イビリたおしてやる。ムヒっ。

それから、翔ちゃんと私は車を乗り換え、政五郎さんから情報提供された骨董屋に向かった。

もちろん、先程死ぬおもいで撮ってきた写真を翔ちゃんに渡し、彼女の名前が佐々木晶子であることも伝えたくえで。

その骨董屋は、此処からだ西に車で20分ぐらい走ったところにある。

駅前を通るので多少の誤差はあるけれど。

「あそこだな」

翔ちゃんが、路肩パーキングに車を停めて指差す方向に、意外にもお洒落な骨董屋がある。

店の名前は、「道具屋・HARRY」

普通にカフェで通用しそうな外観に驚いた。

「あれが、骨董屋さん」

「ああ、政五郎さんからの情報だから間違いない」

二人は車から降りたち、相合い傘ならぬ日傘で店へと向かった。

店内に入ると、想像以上にお洒落な品々が並べられていた。

雰囲気があって、見ていて楽しくなる。

中には、私は初めて見るものもあった。

得に、四角い大理石の上に真鍮色の金属製の取っ手がついた摩訶不思議な品が。

「翔ちゃん、あれ何」

おもわず、聞いた。

「あん？ああ、あれはレバー式のスイッチ。今で言ったらブレーカかな？」

翔ちゃんも余り解っていないようだ。

「すいません。政五郎さんの紹介でうかがった。久瀬と言います」

店長らしき男性に声をかけ、事情を説明する。

「はい、聞いていますよ。政五郎さんの話しですと、うちで半年前に買い取った短刀について聞きたいとのことでしたが」

店長さんは、30代前半ぐらいだろうか、ふっくらとした体型で口髭がよく似合う顔立ちで、笑うと白い歯がとても素敵。

「ええ、この写真のものと同じ物ですかね」

とりあえず、翔ちゃんは短刀の写真だけを店長さんに見せた。

それを受け取った店長は、素敵な笑顔で「ええ、そうですよ」と言った。

トメお婆さんの大事な短刀が見つかった。

「よかった、それ見せていただけますか？」

「はい、もちろん。少々お待ち下さい」

そう言ってから店長は奥へと消えた。どうやら、短刀だけに金庫で保管しているようだ。

「お待たせしました。こちらになります。お好きなだけ、ご覧になって下さい」

「ありがとうございます」

差し出された短刀を写真と見比べているが、どうやら間違いはないようだ。

あらためて、翔ちゃんは佐々木晶子の写真を懐から取り出す。

「店長、売ったのはこの方ですか？」

澄んだ目が真剣になる。

「そうですね。この方で間違いありません」

はっきりと断言してくれた。

これで、一応は解らないことは調べつくしたが、翔ちゃんはこれからどうしようと思っているのだろうか？

「それじゃあ、これ取り置きしておいて下さい。それと、この短刀の見積書を一枚いただきたいのですが？」

えっ。見積書？

「この短刀は、直ぐさま買い取らせますから」

ええっ誰に？買い取らせる。まさか、あの佐々木晶子？

「はい、畏まりました」

程なく、店長が見積書を翔ちゃんに手渡すと、私達は道具屋を後にする。

.....

「翔ちゃん、これからどうするの？」

私は、便利屋の事務所に戻ると、翔ちゃんにこれからのことについて聞いてみた。

それに対し、帰ってきた答えが・・・

「ああ、原因を作った奴らと呼ばい出してきっちりとケアしないと！」

えっ、奴らとは？

短刀はどうするのだろうか？

今日も、ゴミ屋敷の片付けが続いていた。

しかし、今日でそれもお仕舞いだ。

数日前まではゴミ屋敷と言われたこの鈴木トメさんの家も、今では、ほとんどのゴミはなくなった。

後は、うちで鼻屑にしているハウスクリーニングの業者にお問い合わせすれば、見違えるほどの家となる。

そうなれば、いずれ此処にも新たな住人が移り住むことだろう。

それとも、さら地にされ土地だけが売却となるか・・・

何れにせよ、鈴木トメさんの人生はそこで終わる。

私は汗だくになりながら、ゴミをトラックに積み込んでいた。

一通り運び終わると、一番奥にある8畳の部屋に行き翔ちゃんに声をかけた。

「翔ちゃん！そっちどう？」

翔ちゃんは、片付け終了とばかりにピースサインをして見せた。

「やっと終わったよ。きつかったあ」

その場に座り込むと、まばゆい笑顔がこぼれる。

「これ運んだら、そろそろだなあ」

えっ？そろそろ？とは、何ゾ。

意味不明なことを言う翔ちゃんと共に、残りのゴミ袋を両手に抱えトラックへ運び込み・・・終了。

さすがに、仕事が完了するとうれしい。

それから二人は縁側に行き、

のんびりとした気持ちで凌霄花を眺めた。

（今日は、少し穏やかな顔をした鈴木トメさんが淡い光を放ちこちらを見ている。

横に居る翔ちゃんも、穏やかで澄んだ目を凌霄花に向けていた。

トメさんと話しているのだろうか？)

しばらくの間、二人は言葉をかわすことがなかった。時間がいつもよりゆっくりと流れていく感じがした。

.....

おっけえでしょ？

「いやあ、終わったねっ翔ちゃん。これで、少しのんびり出来るかな？」
隣の翔ちゃんは笑っていた。
カットの合図で、今回のドキュメンタリー撮影は終了となったわけだが、
こんなの撮影したところで面白いのだろうか？
スタッフが機材を片付ける光景を見ながら私は思った。
まあ、ギャラがよかったしおっけえでしょう。
でも、スタッフともお別れ、少し淋しい気もする・・・
もう少し、助監の前原をいじめておくのだった・・・まっ、いっかあ。

.....

私と翔ちゃんは縁側に座ったまま、みんなが去って行く光景を、
ボ～としながら眺めていた。スタッフが帰り際「お疲れ様」と言っは去って行く。
全員が居なくなると、今までスタッフが居た場所に、二人の男女が現れた。
一人は、役場の政やん。もう一人は、あの佐々木昌子だ。
何故此処に？翔ちゃんが呼んだのか？

二人は、こちらに近づいてくる。

「いらっしゃい。此処もだいぶ綺麗になったでしょ。政文わざわざすまなかったな」

翔ちゃんは、何時もよりだいぶ真剣な面持ちで二人に語りかける。

佐々木昌子は何故此処に呼び出されたかも解らない様子だ。

「ああ、別にかまわないさ。それにこれは此方のミスだからね」

役場に勤める、東海林政文。通称政やん。と言うか私だけがそう呼んでいた。

政やんは、某有名大学出なのだが何故か地元が一番だと言い。今の役場職員の道を選んだ。ちょっと変わった人だ。でも、私達にとっては仕事の依頼人であり、翔ちゃんの親友でもある。今日もさらさらヘアを靡かせ、シャープな顔立ちに縁なし眼鏡をかけ、スーツのよく似合う男。歳は翔ちゃんと一つ違いと言っていたから・・・幾つだろ？

25、6だったかな？とにかく、いい男には違いない。

「あの、何故私が此処に呼ばれたのですか？

何の用なのでしょうか？」

佐々木昌子は、立ち上がった翔ちゃんに詰め寄る。

私はあの時の事がバレルことを恐れ、翔ちゃんの背後に隠れるように身を寄せる。

「いやあ、実はですね。此処の住人であった鈴木トメさんがどうしてこのようなゴミ屋敷にまで陥ったか。その理由が解りましたので関係者の方をお呼びしてご説明しよう。そう思ったものですから、それで役場の政文とあなた・・・佐々木昌子さんをお呼びした訳なのですよ。ご足労おかけして申し訳ありませんが、これから話す事を聞いていただけませんか？」

翔ちゃんはそのままで言うと、また縁側に座る。私はその場に取り残され、昌子と眼が合ってしまった・・・バレタか？

「どう言う事です。それ？それに貴女は先日の介護を頼みたいと言ってきた人ですよ」

昌子は、私の顔と役場の政やんの顔を交互に見ながら言葉を続ける。完全にバレタ。

政やんは気にもしていない様子だ。

「きちっと説明してください」

教員委員のような態度の昌子。

「まあ、怒らないで下さい。これから、きっちり説明しますから、佐々木晶子さん。自己紹介が遅れましたが、俺は久瀬翔。そして、そこに突っ立って居るのが千里。まあ、もう顔は知っていますよね。で、そっちの澄ました男が貴女もご存知東海林政文。紹介が終わったところで、座りませんか」

翔ちゃんは、ぼんぼんと縁側を叩くと、にこやかに笑った。でも、私のことを突っ立って居るはひどい。

招かれるまま、右隣りに晶子。そして、政やん。私は、翔ちゃんの左隣りに陣取る。縁側に移動する際も、晶子は「何なのもう」と、憤慨していた。

「では、これから話すことはあくまで我々が調べた事実を述べるだけですので、言いたいことがあればその都度おっしゃって下さい。あっ、千里。鞆持って来てくれる」

翔ちゃんは私に向き直ると、アフターケアのアタッシュケースを持って来るよう指示した。

「うん、解った」と言って、直ぐさま車からアタッシュケースを持って来て翔ちゃんに渡した。

「ありがとう」と言い、翔ちゃんは再び晶子へ目を向ける。

晶子は何が起こるのか、思いあぐねた様子で目がキョロキョロしていた。

「まずは、このゴミ屋敷の元住人だった鈴木トメさんのことから説明しましょう。

トメさんは約半年前、自分の物忘れがひどくなっている事を気にしていた。

もしやと思い病院で受診することに決め、医師の診察を受けました。

その時の診断結果は進行性の健忘症だと言われた。医師からはまだ入院するほどではないが、心配なら介護ヘルパーを雇うよう奨められたようです。

そこで、トメさんは奨めもあってか、ヘルパーを雇うことにした。いったん家に戻ったトメさんは、何処がいいのか迷う。

で相談を持ち掛けられたのが、そこで澄ましている彼、東海林政文。だよな、政文」

ここまで話すと、政やんに言葉をなげかける。政やんは「ああ、そうだ」と言ってかえした。

晶子は相変わらず。何が言いたいのだと言わんばかりの表情を翔ちゃんに向けていた。

それを無視するかのように翔ちゃんは、言葉を続ける。

「そして、相談を受けた彼は自分が担当ではなかった為に福祉課に聞いた。

すると、福祉課からの答えは、佐々木晶子さん、貴女が勤めていた天使の羽を紹介された。

そして、何も考えずにトメさんに紹介した。

このような経緯があり貴女が派遣された。そうですね。晶子さん」

やっと晶子に話しが及んだ。だが晶子はまだ、翔ちゃんの意図を理解していないようだ。

「何なのですか、それがどうかしましたか？派遣されたから来た。それだけです」

「ええ、そうなのです。偶然にも貴女のような人が来てしまった」

この話しを聞いた瞬間、晶子は目を吊り上げ翔ちゃんを睨みつける。だが、逆に翔ちゃんは何時になく鋭い視線を昌子に向け、何か言いたそうにしていたが口をつぐんだまま動かない。

しばらくの沈黙が続き、翔ちゃんが発するオーラが重い空気を呼び込み辺りにパッと広がる。その瞬間、息が出来ない感覚に襲われた。これは、ヤバいって翔ちゃん。

パンっとその感覚が弾ける。やっとの思いで抜け出せた時、声が聞こえた。

「当初は、貴女も普通にトメさんの介護をなさっていたのでしょ。

そしてトメさんも安心しきっていた。なんと言っても、役場の紹介ですから」

はあはあ、翔ちゃんが再び鋭い目で政やんを見据える。その視線に気づいたのか、政やんは沈痛な面持ちで俯いた。

それを、確認したかのように昌子へと目を向ける。今日の翔ちゃんは怖い気がした。

「え、ええ、そうですとも。私はトメさんの介護をきちっと行っていました。それが何かいけないとでも言いたいのですか？」

先程の翔ちゃんのオーラに中てられたのか少し動揺している。だが、まだこの女は自分の犯した罪を認めてはいない。既に自分でも気づき始めているにも関わらず。

「ええ、介護だけしていればよかった」

「何が言いたいのです。あなたは」

「トメさんが日記をつけていたのをご存知ですか？行動メモと言った方がいいのかも知れませんが。どうです？」

「し、知りません。そんなもの」

昌子は日記のことを聞いた時。表情を硬くする。ようやく自分の立場を理解したのか？

「そうですね。知っていればあんなことはしなかったはずですから。ここに、その日記があります。この日記は、ゴミ屋敷の中でゴミと一緒にあったものです。だが、これだけは箱に入れ綺麗に風呂敷で包んでありました。誰かに見つけてほしかったんでしょう。読んでみますか？」

翔ちゃんは、アタッシュケースからトメさんの日記を取り出すと、あの事実が書かれたページを開き昌子に手渡した。

それを見た昌子の顔がみるみる青ざめる。

自分自身を取り戻そうと必死に表情を取り繕うが、逆にそれが顔をこわばらせ、頬が痙攣するのが見て取れるほど動揺をあらわにする。

「こ、これが、何だと？まさか、私がトメさんのお金を盗ったとでも言いたいのですか？」

そう、昌子が犯した罪はすべて私達が調べ上げた。それなのに・・・見てとれるほどの動揺を隠せないでいるにも関わらず。自分の口を開こうとはしない。

「ええ、もちろん。そのつもりでお話しているのですが、あなたはそれでも惚けるつもりですか？そろそろ、お止しになったらいかがです。すべて調べたうえでこちらは話しているのですけれど」

昌子はそれを聞いてもまだ押し黙ったまま自分の口から罪を告白しようとはしない。

「仕方ありませんね。これに見覚えがありますよね」

翔ちゃんは、ため息交じりに口にする。ゆっくりとアタッシュケースから通帳を取り出すと昌子に見せた。トメさんのあの通帳。

引き落としのあった日付。

佐々木昌子の介護訪問する日。

毎週金曜日、引き落とされていた金額は十万円ずつ。何回にも亘って引き落とされていた。それを見た昌子は不思議と表情が和らいだ気がした。それでも、口を開こうとはしない。翔ちゃんは、次に、楓さんから受け取ったATMの写真も見せた。

「これでどうです？銀行であなたがトメさんの、この通帳から何度もお金を引き落としている動かぬ証拠を持ってやつです。ここまでしないとあなたは罪を認めないのですか？」

それを聞いた時昌子は笑った気がした。

「そうですか、全部調べたのですね。何処で手に入れたか知りませんが、確かに私がやりました。そこまで調べているのであれば、あの短刀も私がやったとご存知なのでしょう」

やはり、昌子の表情が変わっている。

「はい、もちろん」そう言うと、短刀を売った骨董店の名前と場所、そして店長に確認も取れたことを告げる。

確認の為、鮮明にした短刀の写真も見せた。

翔ちゃんも、何時もの翔ちゃんだ。何故？

いつの間にか、罪を問う者と罪を問われる者のとの関係ではなく、人と人との関係性に变化していることが不思議でならなかった。

「そうですか」 昌子はそう言ったきり、押し黙ってしまい。俯いた。

「あなたは、此処に来てトメさんの介護をするようになってから、何かのきっかけで財布からお金を抜き取った。そして、それがトメさんに解らないと知れると味をしめ毎週それを繰り返した。それでも飽き足らず、通帳に手を出してしまった。最後にはトメさんの大事にしていた形見の短刀までも売ってしまった。だが、トメさんはそれに気づいてしまう。日記を何度も読み返し、自分の勘違いでないということに・・・しかし、トメさんが気付いた時には遅かった。病気のせいで気づいたことさえ忘れてしまった。それで、あなたは罪に問われる事無くそうしてられる」

「そのとおりです」 昌子は俯いたまま言った。

「だが、トメさんは記憶をなくしても、あの短刀だけは取り戻さないといけない。そんな気持ちが心のどこかにあったのでしょうか。だから、外で見かけたものをやたら収集するようになった。それが、此処のゴミ屋敷の始まりだ。その原因を作ったのもあなただ。佐々木昌子さん。あなたは、まっとうに生きてきたあの婆さんの人生最後の大事な時期に泥を塗ったことになる。それを頭に叩き込んでおくんだな。一生」

「はい。申し訳ありませんでした」

そう言った昌子は、俯いたまま大粒の涙を流していた。昌子のやったことは許されることでは決してない。しかし、介護の辛さや金銭面を考えると、昌子一人の問題ではないような気がする。こんなことを言えば怒られるかもしれないが、人に尽くす仕事をしている方達をもう少し敬う社会性があってもよさそうなものだ。

「それで、どうするつもりなんだ翔ちゃん」

今まで沈黙を守り通した政やんが口を開いた。すべての事情を知った上でこれからどうすべきか、このような事件に巻き込まれてしまったトメさんは、既にこの世にはいない。

「ああ、そうだな。俺らは刑事でも何でもない。事実を知った所で何をする訳でもない。ただ、介護の仕事を目指した程の人だ、これから何をすべきか佐々木昌子さんなら理解しているはずだ。だから、俺らは何もしない。それが答えだ。なあ、千里」

翔ちゃんが私の方に向き直ると笑顔を見せる。そう、私達は何もしない。

「うん、もちろん」

「ありがとうございます」

俯いたままでいた昌子が顔をあげる。その時この人なら大丈夫と思えた。翔ちゃんの思いが伝わったはずだ。きっと立ち直れる。

「そうか、なら俺はこの人の意思を尊重するまでだ。じゃあ、俺はこの辺で失礼する」

そう言うと、政やんは立ち上がり帰ろうとした。だが、翔ちゃんはそれを許さなかった。

「ちょっと待て、政文」 そう言いながら、昌子の方に目線を向けると状況を考えろといわんばかりに目配せしている。政やんは意外に鈍感なところがある。

「あ、ああ。佐々木さんこれからどうなさいます」

昌子に向け話す政やん。それでいい。

「はい、これから自首しようと思います」

昌子は覚悟を決めた様子で、すっと立ち上がり、誰ともなく頭を下げる。

「そうですか解りました。僕も、ご一緒しましょう。翔ちゃん、それ受け取っておこうか」
政やんがそれと言ったのは、トメさんの日記とかのことだろう。しかし、ヤバいのもあるの
だが、それを渡していいのか翔ちゃん。

「あっ、これか。解った。ええっと、通帳に日記、それとアルバム。これで全部だ」
やはり、あれはまずいよね。

「なんだよ、そっちにまだ写真残っているだろ。そのA T Mの写真もよこせよ」
政やんは真顔で突っ込んできた。気づいていたか、どうする。

「こ、これはダメだ」

翔ちゃん、それじゃあ言い訳にもなっていないと私は思うのだけど・・・

「何だあそりゃあ。ダメだってどう言うことだよ。いいからよこせよ」

何か、取っ組み合いになりそうだな。

「こら、俺にそんな口きいていいのか？ダメなものはダメ。それに今回はお前にも責任はある。
従って、全面的に俺に従え。ついでにこれやるから」

すでに翔ちゃんジャイアニズムになっているし、それに、何か渡した？

「どういう言い訳してんだよ。それに何なんだこれ、請求書じゃないか」

ああ、あれか。翔ちゃんナイス。かな？

「だから、それは婆さんの大事な形見の短刀、
骨董屋にあるから、まあ、警察に一応押収されるだろうけど、戻ったらそっちで買い戻して婆さ
んの墓に手向けてくれ。絶対」

「チッ、何でそんな事だけ俺に押し付けんだよ。自分で買い取ればいいだろ」

政やん、それは無理だから。

「はははっ、そんなの出来ればとっくにやってる。出来ないからお前に頼んでんだろ」

そうでしょうとも、さすがに我が便利屋にそんな財力はありません。

この様子を、見ていた昌子は涙を流し必ず私自身でお金をお返ししますからと告げた。

それを聞いた政やんは、「たくっ、解ったよ。貸し一つな」そう言うと二人連れだって、元ゴ
ミ屋敷を後にした。

結局、A T Mの写真は忘れたのか、気を利かせてくれたのか政やんは何も言わなかった。

.....

そろそろ、黄昏が迫っていた。

私達は、あのノウゼンカズラに目を向けた。

トメさんが笑っているような気がした。

「そろそろ帰るか千里」

「そうだね」

.....

ガサッ

「ん？なんだろう。今音しなかった？」

「ああ、そうみたいだな」

.....

「ああ、前原あ。隠し撮りしていたなあ。どっからだ吐け、何時から隠し撮りしていたあ」

.....

「占い館からだとお～カメラよこせえ、ぶち壊してやる。よこせえ～」

この後、私と助監督の前原との死闘が続く。